

航空

一 錬飛本土防空

航空特幹生の苦勞

滋賀県 佐野 岩 男

昭和十九年七月末に第八航空教育隊で基礎教育を終えた第一期特別幹部候補生（試験を受け、適性検査の上戦闘機整備員となる）二個中隊編制二四〇名は、行く先も告げられず教育隊を後に東京へと向かう。上野駅へ到着すると急いで東北本線で出発である。発車後どれほど時間が過ぎたか記憶にはないが、鉄道は不通とのことだし、自由に窓を開けることも許されず、どの辺りかも見当がつかないまま数時間も過ぎた後、

ようやく動き出す。

上野を出てから二日目ぐらいであつたと思うが、東北地方は大水害で鉄道は至る所で寸断されているとの情報が入り、いやな予感が頭をよぎる。山形駅で立往生、出発の予定が立たないのか、長い時間を車中で過ごし、ようやく動きだす。

一夜を過ぎて横手駅に到着、目的地への見通しがつかないとの報が入り、取り敢えず下車、休憩の許可が出る。長時間ぶりの外気はまた格別である。珍しいものをと散策するが開店している店は見当たらぬ。水害のためだとか、いや売るものがないのであろう、と話し合ひながら列車へ戻ったが、発車予定はまったく分らないまま、何時間を過ごしたであろうか。夜の帳とほりがおおりる頃、ようやく動きだす。

車中では行く先を千島か北海道方面と想像話ばかりに尽きている。もとより身はお国に捧げる覚悟で故郷を後にした体でも、しばしの安らぎにも不安が覗くのである。一夜明けても鎧戸を下ろしたままの列車は、スピードもなく走りつづけるが、どこを通過し何線を走っているのか方角の見当もつかない。昼食用の乾パンをかじって数時間過ぎたころ、列車が徐行をはじめたと思うやしばらくして停車する。安堵と不安が交錯するうちに、ここが盛岡駅と分かり、ただホッとする。下車後直ちに行軍、間もなく部隊へ到着した。

所属の内務班が決まったのは二日後であった。後日の話では、この部隊は第四盛岡騎兵連隊の後で受け入れ予定がなく、急遽編制された由である。そのため整備訓練用の飛行機は見当たらず、連日教育隊の復習のような状態であった。

到着以来異常な異臭と舎庭の散乱は目を覆うばかりで、ここが部隊かと思う惨状である。聞けば部隊兵舎は中津川の氾濫で二〇〇三〇センチ浸水したためと分かり、各地で伝染病がかなり発生しているようであつ

た。我々も飲料水はなく、もちろん風呂は入れない毎日が続く。そのため皮膚病が蔓延し、特に全員が陰金に罹病し、薬剤の配布もない。衛生兵はサルチル酸塗布の一点張り、珠に陰金への塗布は焼けるような熱さに跳びはね、この痛さに耐える様は今でも戦友の語り草となっている。

加えて食糧事情が極めて悪く、主食はコウリヤン六割ぐらゐの混色で、その上湯茶も満足に当たらず、配食を全部食った者はほとんどいない状況であった。何しろ飲料水すら不足のため、深夜隠れて防火用水やウガイ水を飲む者まで出るほどであった。ようやく風呂に入れたのは一カ月以上も過ぎてからであった。

入浴ができ、十日も過ぎたころ、夜の点呼に明日の行動命令が出され、「脱柵兵の搜索命令」である。脱柵した兵は八月一日に入隊したが、水害直後の極悪な食と厳格な軍隊生活に馴染まず逃避に走ったのであろう。翌日三、四名で岩手山麓の三方原（大正時代、天皇統帥による東北大演習があつた）に入るが、広大な荒野で方向すら掴めず、演習場周辺の搜索に切り換え

られたが手掛かりは皆目擱めず、ただ林檎^{りんご}を収獲するかすり姿の乙女たちの笑顔だけが印象に残る。

数日後、今度は部隊葬の準備でそれぞれ配置先の命令を受ける。自分は受付・案内班で、市内全旅館にバスで分散案内するのである。受付をしていて参謀遺族の方が意外に多いので班長に内容を問うと、千島列島に向かう大型輸送船が潜水艦に撃沈され、その乗員・兵士の部隊葬であることを知らされた。その中に東京の呉服店の方で十日前に結婚した人もいたため私は心を痛めた。

このようなことで戦況が本土近海に及んでいることから戦友と覚悟を改め合うのであった。部隊葬が済んで幾日過ぎたであろうか、東部〇〇〇部隊に転属の下命を受ける。

配属部隊がどのような部隊であるのか引率隊長も把握していないようで、ちょっと不安が胸をかすめる。翌々日、上野駅経由で小田急電鉄・厚木駅に到着、三十〜四十分の徒步行軍の後、川辺の桜並木通りに入る。前方に衛門らしいものが見え隠れする。転属先に到着

らしいと、後部でぼそぼそ話す声が聞こえるうちに到着。直ちに兵舎に入ったがすでに夕暮れ迫るころであった。

休む間もなく内務班別の指名、班長、班付の紹介と息つく間もない。着装品の整理を終え、しばらくして配食、銀めしにおかずの良いのにいささか驚く。みな満足そうな顔付きである。点呼時に隊付きや班長の多くがノモンハン戦参加者であることを知り、明日からの訓練に想像を逞しくしながら就寝する。

九七式戦闘機の再整備訓練を二週間も受けたであろうか、一冊の教程の配布を受ける。「ハ45発動機九気筒複列一八〇〇馬力キ八四」の整備教程である。古山教官から「本機は陸軍航空隊の最新鋭機で、第一線配備はこれからであるので、短期履修に努力せよ」との説明と訓示を受ける。以後、午前中は格納庫での危機解説、午後は実技訓練の毎日が続く。何しろ全教程二百ページぐらいだったと思うが、教程は極秘扱いで、返却しなければならぬので必死で取り組んだ。

一カ月を過ぎたころより、機付訓練が付加され、直

接訓練機の整備助手となる。キ八四（後「疾風」となる）の各部には最新の技術が採り入れられているため、ベテラン機付長（古参曹長）でも時々頭を傾げる状態^かで、特にミスプラグの発見、油圧関係の作動不完全等は悩みの種であった。十月末、正規の機付を命じられる。機付長・服部軍曹、機付三名で「キ八四甲型」の整備に当たる。

本機は試作機直後の量産期でエンジンカバーや点検口のカバー脱着にも不具合があり、金属工作兵の支援を受けることもしばしばであった。

同時期に本機と同じ機種^の戦隊が出動した。菊水マ^{ーク}（ベテランパイロットばかり）の精鋭二十二戦隊で、南方へ出動したと聞く。十一月中ごろ、機付班^更で錬成訓練機機付となる。連日錬成員の猛訓練後に焼けたエンジンの背に点検の手を伸ばすと腕も度々火傷する。それでも一度始めた点検は途中で休止は許されない。少なくとも一系統を完全に整備確認完了までは死に物ぐるいである。

この頃、特別操縦見習士官一期生、少飛十四期生の

錬成が終わり、特操二期生、少飛十四、五期生が錬成訓練を始める。幾日も経たないうちに陸上部隊よりの転科生（少尉候補生や関東軍からの転科生も多かった）が錬成に加わり、錬成員は百名を超えていたであろうと思われる。

錬成員のほとんどが九七式戦闘機（脚固定）からの移行で、引き込み脚、可変プロペラ、操縦性能等に雲泥の差があり、その差を埋めるため、操作訓練を一式戦闘機（隼）で短時間の移行訓練を受けてから「キ八四」の錬成訓練にはいったと記憶する。

このような状況下なので「キ八四」での離着陸訓練で脚の操作ミスによる胴体着陸をはじめ幾多の事故も発生した。その後、事故続発のため、「キ八四」の複座訓練機が発案され、複座機による初期訓練が実施されて事故は激減したように思っている。

整備を任務とする我々には、飛行訓練内容は詳しくは分からないが、当日の訓練に伴う準備伝達により操縦訓練が以前とは大幅に短縮され、明らかに特攻攻撃の専門訓練に重点があることは明白であった。十一月

初めごろに久しぶりの休暇で戦友と軍刀の調達準備のため相模の軍刀製作所へ向かう途中で空襲警報の発令に遭い急遽引き返す。

この空襲後、初めて我々の部隊に「キ八四」の搭乗員錬成と帝都防衛任務が併せ課せられていることを知り、自分たちが負う任務の重大さに緊張感が高まり、深夜まで戦友と語り合い眠れなかつた記憶は今も消えない。連日の搭乗員錬成に定期点検（一定の飛行時間ごとの総点検）も多くなる。オイル交換などでは、激しい風の日であると整備服は油漬けのようになり、その上火山灰の砂塵が吹きつけ、あたかもサンドペーパーの状態になることもしばしばで、その都度ガソリンで洗い落とし、次の作業に入るのであった。

十二月初め、何度目かの空襲警報が鳴り響く。整備完了後の試運転も終わり、整備器具を整理し始めたころ、突如、宮井教官が巻き上げた飛行帽を下ろしながら右手を回し、駆け足で「機部（機付長）回せ」と怒鳴りながら操縦席に駆け上る。その時の眼光と勇姿はまさしく荒鷲そのもので、これが我が機の初出撃であ

った。何時間か経過してから、隊長機着陸の知らせにピット（指揮塔）の外で待機していた機付は一斉に飛び出し、無事誘導停止するや間髪を入れず部隊長への帰還と戦果報告を聞き漏らさじと耳をそば立てる。戦果報告で二機撃墜の大きな声に、我が機の初戦果を機付長共々小躍りして歓喜した気持ちは今も体に焼き付いている。この迎撃戦により幾日目かに整備隊長より「星に流れ矢」の撃墜マーク、二個を胴体に入れるよう指示され、機付長と共に赤ペンで描いたときは整備兵としての冥利と誇りを改めて噛み締めたものである。

その後、何回かの警報発令に我が機の出撃はなく、錬成訓練後の整備で精いっぱいであった。高い台地の飛行場に寒風は容赦なく吹き付ける中で離着陸、急降下訓練はますます激しくなる。そうした中で出撃に備えての整備は夜間遅くまで続くことも度々で、曜日すら覚えのない日々であった。夜の点呼に明日は休日とする命令で気が付けば大晦日である。翌朝の朝食に雑煮と少しの酒と肴に緊張の中の正月を感じる。

十二月中旬ころであろう、米軍の硫黄島攻撃、攻略

の情報が伝わり隊内の緊張感が一段と高まってきて、
いよいよ本土空襲が激しくなりそうだと、戦友と互い
に万々に備え遺爪、遺髪を密かに故郷への便りの中
に入れる。相模湾からの寒風はますます冷たく、朝礼後
の駆け足の足元は霜柱に編上靴が沈み、エンジンオイ
ルの硬化が頭をかすめる。朝の試運転も始動車での空
転を長くして始動し、暖気運転に留意しながら点検の
完璧を期し、試験飛行に備える。

飛行訓練開始後、発進ラインに向かう途中、空襲警
報の発令。マリアナ群島発進のB29の編隊が関東地方
に向かっているとの通報に急ぎ燃料、オイル、機関砲
弾丸等の点検を済ませ迎撃に備える。すでに名古屋地
方の軍需工場、軍施設は空襲の被害を相当受けたとの
情報が伝わっていた。硫黄島の攻略と関東地方の軍施
設、工場を目標とするB29編隊の来襲は日ごとによく
なり、二月初めごろより連日迎撃となる。天候は連日
吹雪となり、帰還機が着陸走行で脚を奪われる事故も
度を重ねる。節分から降り続いた雪は離着陸不能にな
るまで積雪する。迎撃隊を出撃させるため部隊全員に

よる除雪作業命令が出た。

連日の雪で芝生の滑走路は泥沼状態が凍結し、積雪
は四〇センチぐらゐもあろうか、雪を三〇メートルぐ
らい運ぶにも時間ばかりが過ぎて行く。わずか幅六〇
メートル、長さ一、二〇〇メートルぐらゐだつたと思
うがじれつたい。いつの間にか深夜になり、休憩の号
令で時計を見ると午前二時、夜食の握り飯二個を食い
終わらないうちに睡魔が襲う。除雪の山で腰まで突込
み、スコップを杖にいつの間にか立ち寝する。周囲の
ざわめきに急いで作業を続け、やがて東雲明け染める
ころ、ようやく作業終了。帰舎後しばらくの休憩。

除雪後の滑走路は泥沼のような状態で離着陸はま
まらない。B29の来襲はますます多くなり、訓練中止
が数日にも及ぶ。迎撃に出撃した機体にはいずれも弾
痕が生々しく、数カ所の被弾は当然のごとくで、特に
燃料タンクやオイルタンクが被弾しているとよくぞ生
還してくれたと、思わず声を掛けることも再三であつ
た。出撃は二〜三機ごとの編隊で、やがて生還して来
た。次々と着陸するが、自分の整備機が見えない時は

心騒ぎ、それが被弾かエンジン不調のためか、僚機の操縦士の戦果報告を一言も漏らさないよう耳をそばだてるのであった。

昭和二十年二月十日、相模湾上空より関東方面に侵入したB 29の編隊は、群馬県の中島航空機の太田製作所を目標に来襲したようで、この工場が「キ八四」の機体を製作する主力工場であることが米軍に察知されていたか否かは知るよしもなかった。勇躍、僚機と共に出撃した倉井教官は、群馬県上空でB 29の梯団一九機を発見する。迎え撃つのは僚機と二機のみで、敵機の集中射撃を浴びながら梯団の長機目がけて突込み、体当りを敢行し、ついに帰らざる荒鷲となる。僚機もまた多数被弾し、墜落途中で運よく落下傘が開き一命を取り止める。

その僚機であった坂田軍曹の報告により、ベテランで胆力がある倉井教官機はB 29梯団の戦闘機（編隊長機）の尾翼に体当たりした。操舵性を失った長機に後続機が追突し、一挙に二機の超重爆撃機を葬った。

この果敢な戦果が第二航空軍司令官に届き、上聞に

達すると共に感状を受ける。軍司令官は隷下隊に通達し航空部隊の範とした。自分の知る倉井少尉教官は平素は穏やかで、部下や同僚に慕われる人徳があり、操縦技術に優れた教官であった。前任地である太刀洗航空隊でも区隊長として同僚、訓練生に慕われていたと聞く。

一錬飛での錬成訓練の時には通常訓練のほか、模型を片手に空戦時の敵機への体当たりは尾翼か操縦席を狙えと教育されていたことを考えると、自らの言葉どおり立証された特攻攻撃は、ただ感嘆するのみであった。このことは後に米軍の五〇五梯団の記録にも残されていることを知った。この日以後、幾日かの出撃で、群馬上空は我が隊の空域とは違うが、中島航空機爆撃に行くB 29を迎撃した多くの空中戦士（教官、助教）が未帰還となり、錬成訓練に少なからず支障を来したように思う。倉井教官の後任に太刀洗より細野中尉が着任され、警報の合間を縫って錬成訓練は激しさを増す中で、錬成完了者の九州方面への転任が相次ぐ。三月に入るや守備隊が玉砕した硫黄島を基地に発進し

たB 29の来襲に加えて敵機動艦隊が本土近海に迫るようになり、飛行機の飛行場外への分散、掩体格納が始まる。掩体は格納庫から一キロぐらい離れた桑畑や雑木林に造られていて、誘導路が柔らかいため飛行場への誘導や掩体への格納に思わぬ苦勞が重なる。

こうした状況の中で昭和二十年三月九日、富士上空を迂回したB 29の大編隊（三八〇機）は次々と帝都を爆撃し、爆弾、焼夷弾の雨を降らせる。投下された焼夷弾で燃え上がる炎は、敵機が撒く電波妨害の白い金属片に反射しながら散つてゆく。探照灯に照らされたB 29が途端に落下して行き高射砲の砲声が激しく響く。迎撃機も相当数出撃していると思われるが空爆の音は消えず、炎は広がりを見せるばかりで、その様は三〇キロ以上はなれている中津台地の眼前のように見え、ただ地団太踏むばかりであった。翌朝、なお火焰は遠く棚引き、川崎辺りまで被害を受けたであろうと思われた。後刻、帝都のほとんどが被害を受け、皇居、明治神宮も被災したとの情報に、この地出身者の肩を落とし小さく見える姿が目を引く。連日来襲する米軍

機に迎撃、出撃も度を重ね、その都度未帰還機の数も重なる。

三月十日の大編隊来襲後の米空軍機は、その後も関東地方の各都市を連日にわたり空襲を繰り返す。一練飛の防空空域は厚木上空とのことであつたが範圍がどの辺りまでかは我々は知るはずもない。度々の出撃で戦死者の弔いも遅れがちであつたが、三月末、二回目の部隊葬が行われる。

そのころ、少年飛行兵第十五期出身の請川房夫伍長（北海道出身・第六十一振武隊・沖縄沖で戦死）が転出前日の夕方別れの挨拶に来る。すでに九七戦、一式戦などで沖縄の海域に散つた先輩たちを想い、最新鋭機で出撃できる俺は幸せだと「いろいろ世話を掛け有り難う。俺は巡洋艦以上に必ず体当たりする。戦果を見ててくれ」と笑顔でいった言葉は今も耳許から消えない。

若干十八歳の美少年であつた。翌日同じ機付の田中候補と血書で「必沈」のマフラー（落下傘を引き裂いた布）を贈る。赤いマフラーを巻く者、操縦席に花を

飾った機と共に離陸を見送る。これが一練飛よりの特
攻出撃第一号であったと想う。今も沖繩を訪れ間座毛
の岸壁に立つ度に、紺碧の沖を眺め、彼らはどの辺り
に沈んだのであろうかと、往時を偲びながら瞑目せず
にはいられない。

【解説】

連合軍、特に米空軍は日本の航空工場を攻撃の重点
としていた。そして次に、米空襲隊を守るために航空
基地、飛行場を壊滅している。これは次の空襲状況に
より証明される。資源の少ない日本を降伏させるため
海上において船舶を攻撃し、生産力は数年にして激減
している。いかに生命を賭して戦い、研究した精神も
技術も、合理的な戦略と物量には勝てなかった。そし
て止めを刺したのは非戦闘員を殺傷した無差別爆撃で
した。

昭和十九年

八月二十一日、B 29型二〇機

八幡製鉄所倉橋地区に夜間来襲

十月二十五日、B 29型五六機

長崎・佐世保・木村海軍航空廠を爆撃

十一月十一日、B 29型二九機

大村海軍航空廠・福岡を爆撃

十一月二十四日、B 29型八〇機

(東京三鷹付近中島飛行機工場) 東京昼間初

空襲

十二月三日、B 29型八六機、

東京中島飛行機武蔵野工場昼間空襲(第一〇

飛行団の一機初めてB 29型機に体当たり攻

撃)

十二月十三日、B 29型八〇機、

名古屋三菱発動機工場・陸軍工廠を爆撃

十二月十八日、B 29型六三機、

三菱重工業名古屋発動機工場昼間空襲

十二月二十二日、B 29型七八機、

名古屋三菱重工業・名古屋発動機工場昼間空

襲

十二月二十七日、B 29型七二機、

昭和二十年

東京中島飛行機工場と市街地区を昼間空襲

一月九日、東京・中島飛行機、横浜等昼間爆撃

(特攻機体当りでB 29型六機撃墜)

一月十四日、B 29型七三機、

三菱重工業・名古屋工場を昼間爆撃

一月十九日、B 29型八〇機、

川崎航空機・明石工場を重点とし昼間空襲

一月二十三日、B 29型九〇機、名古屋の三菱重工業

・名古屋航空機工場を昼間爆撃

二月十日、B 29型一〇〇機、

太田市の中島飛行機工場を昼間爆撃

二月十九日、B 29型一〇〇機、

東京中島飛行機・武蔵野工場を昼間爆撃

三月四日、B 29型一九四機、

中島飛行機・武蔵野工場等空襲

四月二日、B 29型一二四機、

主目標中島飛行機・武蔵野工場夜間爆撃

四月四日、B 29型七八機、中島飛行機大泉を、B 29

型一一五機、立川飛行機をそれぞれ夜間爆撃

四月七日、B 29型一一一機とP 51型九七機、東京中

島飛行機・武蔵野工場を午前中爆撃(三月十

七日硫黄島玉砕のため同島より戦闘機P 51型

機がB 29型機の護衛機として出現)

四月十二日、B 29型一七八機、中島飛行機・武蔵野

工場を午前中爆撃、同型機八四機、郡山市の

工場地帯爆撃

四月二十四日、B 29型一三三機、立川の日立航空機

他を午前に爆撃

四月三十日、B 29型一一一機とP 51型一〇〇機、

立川陸軍航空廠等爆撃

五月五日、B 29型一七二機、

呉の工廠・第一航空廠を爆撃

五月十一日、B 29型二〇五機、神戸市爆撃(川西航

空機の甲南工場焼失)

六月九日、B 29型機、名古屋・明野・各務原・川西

航空鳴尾、同明石工場爆撃

六月十日、B 29型機、日立製作所・霞ヶ浦水上基地

・日立航空機千葉工場爆撃

六月十五日、B 29型五一六機、大阪・尼崎を爆撃

(米軍の日本本土市街地攻撃は第一段階を終了)

六月二十二日、B 29型一六八機、川西航空姫路工場

と三菱重工玉島工場を、一二九機は三菱重

工業・川崎航空各務原工場をそれぞれ爆撃

六月二十六日、B 29型三六〇機、京阪神・名古屋付

近の工場を爆撃

七月二十一日、B 29型機、水島の三菱重工業第七製

作所(航空機製作)集中爆撃

七月二十四日、三五一機、住友金属大阪・川西航空

宝塚・大阪造兵廠を、一五六機、愛知航空・

中島飛行機半田を爆撃

七月二十五日、米機動部隊艦載機、西日本一帯に来

襲(呉軍港・航空施設に被害)

八月六日、B 29型、広島に原子爆弾投下

八月七日、B 29型七〇機とP 51型三〇機、豊川海軍

工廠が爆撃され、女子挺身隊員、小学生ら二、

四〇〇人余即死

八月九日、B 29型、長崎に原子爆弾投下、米艦載機

二〇〇機釜石市屋間来襲、釜石製鉄全滅

八月十日、B 29型一〇〇機とP 51型五〇機、東京周

辺工場地帯を爆撃

かくて日本の航空機製造能力は逐次低下し、更に航空燃料も底をついてしまった。

○渡辺洋二氏著「大空の攻防戦」(朝日ソノラマ)

に佐野岩男氏ら第一期特別幹部候補生(特幹)は

九七戦エンジンについて次のごとく記されている。

『操縦者と同様に、錬成飛行隊で育った整備員も逐次、実戦部隊へ移っていく。転出する少飛の穴を埋めるように、九月十日に第一期特別幹部候補生七十名ほどが、一錬飛にやってきた。』

航空、船舶の職域を中心に、現役下士官の不足を満たすべく大量採用された特幹は、このとき十八〜十九歳、中学以上の学力を持つ者が主体で、世にいうような年少者ではない。

―佐野氏は志願をせず幹候を受ければ陸軍将校への道があつたが、一時も早く軍務へとの意志のもと特幹への道を選んだと言われている

工業学校の機械科を出て海軍工廠に勤めていた佐野岩男候補生は、勉強に励んで一通り頭に入れたものの、八四五の整備よりも主脚の故障、不具合に悩まされることになる。

脚でもう一つの問題だったのは、四式戦で飛び始めたばかりの錬成員が、三舵の操作に夢中になり、脚を出し忘れて胴体着陸が何回かあつたことだ。胴体着陸すれば、プロペラが地面をたたいて回転軸がゆがみ、大抵は使いものにならない……。

また、元飛行第五三戦隊員原田良次著「帝都防空戦記―B29体当り特攻の悲劇」の附録IIの体当り者一覧表六十二人中に、倉井利三少尉が記載されている。

『倉井利三 少尉 操縦下士官第七七期 一錬飛B29の尾部に体当り粉碎。その破片が二番機に激突。

二機撃墜。戦死』

航空整備兵の戦歴

愛知県 大野 實

昭和十七年徴集の現役兵として昭和十八年四月に各務原の飛行師団第一航空隊に入隊しました。入隊前は名古屋市内の藤田製作所に勤め、砲兵工廠の砲弾などの製作に従事していました。家庭は父は既に没し、母と妹の三人暮らしでした。私の入隊出征後は、母は和裁の師匠、妹は会社勤務で、出征家族援護などは断つて頑張ったそうです。

入隊後間もなく加古川の第二航空教育隊整備中隊に転属。ここで九月まで初年兵教育を受けました。教育内容は一般歩兵の初年兵教育と共に整備兵としての教育も加わりなかなか大変でした。

また内務班の扱き（しごき）の厳しさは並大抵なものでなく、ビンタは第一日目から始まり、編み上げ靴で顔面殴打で顔面変容するすさまじさです。およそ内